

崇神天皇、  
すじんてんわう

開化帝の第二子なり。  
かいくわてい

母は、伊香色謎皇后。  
はゝ いかしくめくわうご

天皇、資性聰敏、  
てんわう しせいそうびん

幼にして雄略あり、  
えう ゆうりやく

壯なるに及び、  
さう およ

寛博謹慎にして、  
くわんぱくきんしん

神祇を崇重し、  
しんぎ そうぢゆう

恒に天業を  
つね てんげふ

經綸せんの志あり。  
けいりん じあり

開化帝の二十八年、  
かいくわてい

立ちて皇太子となる。  
た くわうたいし

六十年四月、

開化帝崩ず。  
かいくわていほう

十月三日乙卯、  
きのとつ

開化天皇を葬る。  
かいくわてんわうはうび

ぐわんねんきのえさる  
元年甲申、

はる  
春正月十三日甲午、

てんわう くらぬ  
天皇、位に即く、

とき  
時に年五十二。

これ  
是を

みま きいりひこい に ゑの すめらみこと  
御間城入彦五十瓊殖天皇となす。

くわつたいこう たつと くわつたいこう  
皇后を尊びて皇太后と曰ふ。

ひのえとら  
二月十六日丙寅、

みま きひめ た くわつたいこう  
御間城姫を立てて皇太后となす。

ひのえいぬ あき  
三年丙戌、秋九月、

みやこ しき うつ  
都を磯城に遷し、

これ みづかきのみや い  
是を瑞籬宮と謂ふ。

ひのとら  
四年丁亥、

ふゆ みづのえうま  
冬十月二十三日壬午、

みことり いは おも  
詔して曰く、惟ふに、

わ くわつそ しょてんわう  
我が皇祖諸天皇の

しんきょく くわつたいこう  
宸極に光臨せるは、

豈あに一身しんの爲ためならんや。

蓋けだし人神じんしんを司牧しぼくし、

天下てんかを經綸けいりんする所以ゆゑんなり。

故ゆゑに能よく世々よゝ玄功げんこうを闡ひらき、

時ときに、至徳しとくを流しく。

今朕いまちん、大運たいうんを奉承ほうじやうし、

黎元れいげんを愛育あいいくす。

何を以もつてか聿おほいに

皇祖くわうその迹あとに遵したがひ、

永ながく無窮むきうの祚くらあを保たもたん。

群卿ぐんけい百僚れう、

爾なんぢ、忠貞ちうていを竭つくし、

共ともに天下てんかを安やすんぜよと。

五年ごねん戊子つちのえね、

民多たみおほく疫えきを疾やみ、

死亡しぼう大半たいはんなり。

六年己丑、つちのとうし

百姓、流離し、ひやくせい りうり

或は、背叛するものあり。あるひ はいはん

天皇、憂惕して、てんわう いうてき

罪を神祇に請ふ。つみ しんぎ こ

是より先、これ さき

天照大神・倭大國魂神をあまてらすおほみかみ やまとのおほくにたまのかみ

殿内に祭る。でんない まつ

此に至り、其の、こゝ いた そ

神を瀆さんことを畏れ、かみ けが おそ

皇女豊鍬入姫をして、わうによとよすきいりひめ

神鏡靈劔をしんきやうれいけん

倭の笠縫邑に遷さしめて、やまと かさぬひのむら うつ

天照大神を祭り、あまてらすおほみかみ まつ

別に鏡劔を模して、べつ きやうけん ほ

殿内に奉安し、でんない ほうあん

以て護身の御璽となす。もつ ごしん ぎよじ

またわうによぬ なき いくひめ  
又皇女淳名城入姫に命じて、

おほくにたまのかみ まつ  
大國魂神を祭らしむ。

七年庚寅、  
かのえとら

はる  
春二月十五日辛卯、  
かのとう

みことのり  
詔して曰く、

むかし わ  
昔、我が皇祖、  
くわうそ

おほい こうぎ ひら  
大に鴻基を啓きしより、

せいげふいよいよたか  
聖業逾高く、  
わうふうたくさかん

王風轉盛なり。

おも  
意はざりき、

いまちん よ  
今朕が世に當りて、  
あた

しほしほさいがい  
數災害あらんとは。

おそらく  
恐らくは、

てう ぜんせい  
朝に善政なく、

とが しんぎ と  
咎を神祇に取りたるならん。

なん しんぎ めい  
盍ぞ神龜に命じて、

もつ ちさい よ  
以て致災の由る所を  
たつら

質さざると。

是こゝに於おいて、

天皇てんわう、

神かむ淺茅原あさぢはらに幸みゆきし、

之これを八十萬やそよろづの神かみに卜ほくし、

乃すなはち大物主神おほものぬしのかみを祭まつる。

天皇てんわう、

復齋戒またさいかい沐浴もくよくして、

殿内でんないを潔淨けつせいし、

以もつて災わざはひを消けさんけことを禱いのる。

夢ゆめに大物主神おほものぬしのかみ告いはげて曰いく、

天皇てんわう、何なんぞ國くにの治をさまらざる

を憂うれへん。

若もし我われが兒こ大田おほ田た根子たねこを

して我われを祭まつらしめば、

則すなはち國速くにすみやかに治をさり、

海外かいぐわいの國くに、

自おのづから當まさに歸服きふくすべしと。

てんわう おほい よろこ  
天皇、大に喜び、

てんか ぶかう  
天下に布告して、

おほた たねこ  
大田田根子といふ者を訪ひ求め、

これ ちぬのあがたのすゑのむら え  
之を茅渟縣陶邑に得たり。

ふゆ  
冬十一月八日己卯、

いかしこを めい  
伊香色雄に命じて、

しんぶつ わか もの  
神物を班つ者となし、

おほた たねこ  
大田田根子をして、

おほものぬしのおほかみ まつ  
大物主大神を祭らしめ、

ながを ち  
長尾市をして、

やまと おほくにたまのかみ まつ  
倭の大國魂神を祭らしむ。

しか のち  
然る後、

た かみ まつ  
他の神を祭らんことを卜するに、

きつ すなは べつ や そよろず かみ まつ  
吉なり。乃ち別に八十萬の神を祭り、

あましやしろ くにしやしろ かむところ かむべ さだ  
天社・國社・神地・神戸を定む。

こゝ お えきしつはじめ や  
是に於いて、疫疾始て息み、

としゆたか たみやす  
年豊に、民安し。

八年辛卯、  
ねんかのとう

冬十二月二十日乙卯、  
ふゆ きのとう

大田田根子をして  
おほた たねこ

大物主神を祭らしめ、  
おほものぬしのかみ まつ

天皇、これに臨めり。  
てんわう のぞ

祭畢りて神宮に宴す。  
まつりをは しんぐう えん

九年壬辰、夏四月十六日己酉、  
みづのえたう じゆつじつ

天皇、夢に感じて、  
てんわう ゆめ かん

墨坂神・大坂神を祠る。  
すみさかのかみ おほさかのかみ まつ

十年癸巳、秋七月二四日己酉、  
みづのとみ じゆつじつ

詔して曰く、  
みことのり いは

民を導くの本は教化にあり。  
たみ みちび もと けうくわ

今既に神祇を禮し、  
いますで しんぎ れい

災害悉く息みぬ。  
さいがいごとこと や

然れども、遠荒の人、  
しか へんくわう ひと

未だ王化に霑はず。  
いま わうくわ けん

其群卿を選びて、四方に遣はし、  
それぐんけい えら よも つか

朕が意を知らしめよと。  
ちん い し

九月九日甲午、  
きのえねうま

大彦命を北陸に、  
おほひこのみこと ほくろく

武渟川別を東海に、  
たけぬなかはわけ とうかい

彦五十狹芹彦命を西道に、  
ひこい させりひこのみこと さいだう

丹波道主命を丹波に遣はす。  
たに はのみちぬしのみこと たには つか

命じて曰く、  
めい いは

教を受けざる者あらば、  
をしへ う もの

兵を擧げて之を伐てと。  
へい あ これ う

既にして、  
すで

共に印綬を授けて、  
とも いんじゆ さづ

將軍となす。  
しやうぐん

將軍、此に始る。  
しやうぐん こゝま はじま

發するに及び、  
はつ およ

會武埴安彦、反し、  
たまたまたけはに やすひこ はん

妻吾田媛とともに、  
つま あ た ひめ

帝京を襲はんと欲す。  
ていけい おそ ほつ

すなわ おほひこのみこと ひこ い さ せりひこのみこと  
即ち大彦命・彦五十狭芹彦命・  
ひこくにぶく これ う  
彦國葺をして之を討たしむ。

たけはにやすひこ あたひめ ちう ぶく  
武埴安彦・吾田媛、誅に伏す。

ふゆ きのとう ついたち  
冬十月乙卯の朔、

ぐんしん みいさつ いは  
群臣に詔して曰く、

はんしや ちう ぶく  
反者、誅に伏し、

きないこと  
畿内事なし。

たゞ かいぐわい くわんぞく  
唯海外の荒俗のみ、

さうどういま や  
騒動未だ止まず。

し だうしやうぐん それすみやか はつ  
四道將軍、其速に發せよと。

ひのえね  
二十二日丙子、

おほひこのみことら おのおのし だう おもむ  
大彦命等、各四道に赴く。

きのえねつま  
十一年甲午、

つちのとう  
夏四月二十八日己卯、

し だうしやうぐん じう い たひら  
四道將軍、戎夷を平ぐるの状を奏す。

こ とし い ぞく き ぶ  
是の歳、異俗歸附し、

かいだいあんない  
海内安寧なり。

十二年乙未、きのとひつじ

春三月十一日丁亥、ひのとあ

詔して曰く、みことのおり いは

朕、初め天位を承けて、ちん はじ てんゐ う

宗廟を保つことを獲たれども、そうへう たも う

明、蔽ふ所あり、めい おほ ところ

徳、綏ずること能はず。とく やすん あた

是を以て、こゝ もつ

陰陽謬錯し、いんやうびうさく

寒暑序を失い、かんしよじょ うしな

疫病大に作り、えきびやうおほい おこ

百姓災を被る。ひやくせいわざはひ かうむ

故に今罪を解き過を改め、ゆゑ いまつみ と あやまち あらた

敦く神祇を禮し、あつ しんぎ れい

教を垂れて荒俗を綏じ、をしへ た くわうぞく やすん

兵を擧げて以てへい あ もつ

不服を討つ。ふふく うち

是を以て、  
官に廢事なく、

下に逸民なく、

教化流行して、

衆庶、業を樂しみ、

異俗、譯を重ね、海外、化に歸す。

宜しく此の時に當りて、

更に人民を校し、長幼の次序、

及び課役の先後を知らしむべしと。

秋九月十六日己丑、

始て人民を校し、

更に調役を課す。

此を男の弭調・女の手末調と謂ふ。

是に至りて神祇和享し、

風雨時に順ひ、百穀成熟し、

家ごとに給し人ごとに足り、

天下太平なり。

故に稱して御肇國天皇と曰ふ。

十七年庚子。かのえね

秋七月丙午の朔、あき ひのえうま ついたち

詔して曰く、みことのり いは

船は天下の利用なり。ふね てんか りよう

而るに今海邊の民、しか いまかいへん たみ

船なきを以て、ふね もつ

甚だ陸運に苦しめり。はなはだ りくうん くる

其諸國をしてそれしょこく

船舶を造らしめよと。せんぱく つく

冬十月、

始て船舶を造る。はじめ せんぱく つく

四十八年辛未、かのとひつじ

夏四月十九日丙寅、ひのえとら

活目尊を立て、いくめのみこと た

皇太子となし、くわつたいし

豊城命をしてとよきのみこと

東國を治めしむ。とうごく をさ

六十年癸未、  
みずのとひつじ

秋七月、詔して、  
みことのり

使を出雲に遣はし、  
つかひ いづも つか

神寶を求めしむ。  
しんほう もと

出雲の振根、  
いづも ぶるね

其の弟飯入根を殺す。  
そ せむじいひりね ころ

彦五十狭芹彦命・  
ひこ い さ せりひこのみこと

武渟川別を遣はして、  
たけぬなかはわけ つか

振根を討たしむ。  
ぶるね うち

振根、誅に伏す。  
ぶるね ちゆう ぶく

六十二年乙酉、  
きのととり

秋七月二日丙辰、  
ひのえたつ

詔して曰く、  
みことのり いは

農は國の大本なり。  
のう くに たいほん

民の恃りて以て  
たみ よ もつ

生くる所なり。  
い ところ

今河内狭山の埴田水少し。  
いまか ぶちさやま はにた みづすくな

是を以て、

百姓、農事を怠る。

其多く池溝を開き、

以て民業を寛くせよと。

冬十月、依網池を作り、

十一月、

苅坂池・反折池を作る。

六十五年戊子、

秋七月、任那國、

始て使を遣はして朝貢す。

六十八年辛卯、

冬十二月五日壬子、

天皇崩ず。

年一百十九。

山邊道上陵に葬る。

追諡して

崇神天皇と曰ふ。